

中国日本商会

みつま

三渚先生の

「ナルホド中国、ナットク中国」



三渚コラム 中国「津津有味」-7

今から 10 年ほど前、“小肥羊”という店が日本に進出しました。もちろん、このコラムをご覧になっている方も多くがこのチェーン店で食事をされたことがあるでしょう。私も池袋の“小肥羊”はよく利用しました。

日本での 1 号店は渋谷。その時のエピソードを紹介した記事が、2008 年 11 月の人民日報海外版に掲載されていましたが、そこには、日中の異文化理解に大変役に立つ内容が含まれていました。ある日の昼、“小肥羊”の楊琨さんが店に行ってみると、店の前にはお客さんが一杯。ところが店には満員につき入場お断りの看板が。楊琨さんはあきれ返り、早速店長を呼びつけ、「すぐあの看板を外せ！」と命令しました。ところが、店長は頑として外しません。決して新米の店長ではないのです。それどころか、1 号店の店長ですから、この道のベテランを採用しているのです。

そこで楊琨さんは日本人と中国人の考え方の違いに気が付きました。日本人は、「満員のところにさらに客を入れれば、先に店にいる客はゆっくり食事を楽しめないし、窮屈この上ない。あとから入場した客も肩身の狭い思いでゆっくり楽しめない。これではどちらのお客さんにもサービスが行き届かず、申し訳ない」と考えます。

中国人はどうかというと、長い間、“吃饭了吗”「ご飯食べた？」があいさつ言葉になっていた社会。「飯にありつく」ことがまず最大の眼目で、よく中国の街角へ行けば、人気の店の前は黒山の人。店の中や前にある座席やテーブルは相席など、当たりまえ、気を付けないとこちらのテーブルの椅子も持っていかれるような状況であることは、中国で暮らす皆様はよくご存じのことです。あぶれた人は立ったまま、あるいは路上にしゃがんで食べていることも珍しくありません。だから、満員だからお客さんを入れない、など、信じられないことです。「相席させればいいじゃないか」と思うのです。

ただ、この事例は別の法則からも十分説明できます。それは、私がいつも日中異文化で話す、日本人と中国人の礼儀に対する考え方の違いです。日本人は、相手に迷惑をかけまい、心の負担をかけまい、というのが礼儀。中国人は、相手に精一杯に誠意をパフォーマンスするのが礼儀です。食事したい人に食事を提供するの最低限の誠意です。個々の事例は一般に様々な解釈を可能にしますが、この原則をわきまえていないと、独りよがりの分析になってしまいます。

誰でも知っている事例が、食事を出されて残すか残さないか、の話。周知のごとく、習近平氏は“光盘行动”「食べ残さない運動」を展開していますが、残すには深い文化的裏打ちがあるので、浸透がなかなか難しい。日本人は、残せば「あら、お口に合いませんでした？」と相手に余計な心配をかけるから、残さず食べる。中国人は、残さず食べれば、「あら、足りませんでした？じゃあ、もっと作ります」と相手は誠意のつくし方が足りなかつ

中国日本商会
みつま

三渚先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



た、と慌てる。どちらも相手の立場で考えていることには変わりありません。ただ、日本人は「料理の質」でものを考え、中国人は料理の量でものを考え、そのうえに礼儀に対する考え方の違いが加味されているのです。